

#50

横浜開港五十年史

こいつか・りゆう

作者: 肥塚龍(1848?-1920)

成立: 明治42年(1909)

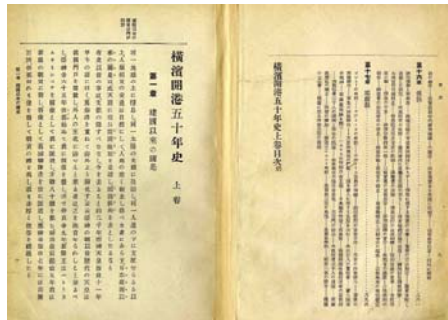


解題

Keyword

- 「横浜沿革誌」
- 横浜開港
- 横浜商業会議所
- 横浜市史
- 横浜毎日新聞
- 対外交渉史
- 「横浜開港側面史」
- 「横浜開港小史」

『横浜沿革誌』に次いで刊行された横浜の通史。上下2巻の大作で、横浜開港50周年を記念して横浜商業会議所から刊行された。当時は横浜市の正史として迎えられ、市史編纂



『横浜開港五十年史 上巻』冒頭 横浜商業会議所事業が進んだ現在もなお、資料的価値を持つ。

■ 成立経緯

編纂者の肥塚龍の自序によると、明治37年(1903)横浜商業会議所の副会頭である来栖壮兵衛(くるす・そうべえ)より、「明治42年は、横浜開港五十年に当れり、横浜商業会議所は今より開港五十年史を編纂するの議を決したり、君、幸にその任に当られたし」と依頼されている。その前年に、二人は既に市史編纂の必要について話していたこともあり、肥塚は「余は喜んで、其請に応じ」明治37年4月より着手する。

『横浜商工会議所百年史』にも、「開港五十年間の歴史編纂のための臨時調査費一千円の予算が満場一致で可決され、編輯主任を肥塚龍に、補助員を川本三郎に委嘱し、編集に関する助力を島田三郎、福地源一郎へ依頼するという来栖副会頭の説明がなされ、横浜開港以来の沿革を調査編纂する目的を以って臨時調査部を設置することが可決された」という趣旨の記述がある。自序はまた

「経営前後六年、明治四十二年二月、漸く、全稿完結せり」と述べている。明治42年4月の役員会で、横浜商業会議所は開港五十年記念事業の一環として『横浜開港五十年史』（#50）を1000部刊行することを決定し、横浜貿易新報社に委託販売させることも可決している。そして、同年5月15日、本書が刊行された。

■ 作 者

編纂にあたった肥塚龍の生年月日に関しては、嘉永元年(1848)嘉永3年或いは嘉永4年と諸説あるが、兵庫県生れであることは確かであるようだ。もと梶山城主・肥塚和泉守佑忠の末裔であるというのが、龍の両親は農業に従事していた。13歳の頃、学問で身を立てようとして、仏門に入る。1年後、単身京都に出て、いくつかの寺を転々としながら学問を続け、京都西郊吉祥院村の草庵の住職となる。僧務をとりながらなお学び続けるが、明治3年ごろ、恩人である京都高倉四条の西念寺の諦導和尚が没したため、その後継として、西念寺住職となる。

明治5年西念寺の後継者を定め、僧籍を抜け、上京する。英学を学ぶため中村正直(敬宇)の私塾同人社に入学するが、学資が続かず退学。ついで芝汐留電信学校官費生に応募して合格し、入学する。明治8年大内青巒らが「東京曙新聞」を発刊し民権を主張していた際、大内家に寓居し新聞編集を手伝った。このため、官費生でありながら電信学校の勤務を怠り官紀を乱したという理由で、一週間拘留され、罰金5円の判決を受けた。同年12月「横浜毎日新聞」の編集主任・島田三郎が新しく設置された元老院の書記官に任官したため、その後任となる。「横浜毎日新聞」は明治3年に発刊され、当時民権論を盛んに展開していた。明治10年持病のため退社する。

明治11年、沼間守一が政治結社嚶鳴社を設立し、肥塚もこれに参加している。こうして肥塚は政治活動に踏み出していくことになる。

明治12年沼間は「横浜毎日新聞」を買収して東京に移し「東京横浜毎日新聞」と改題。これ以後、「東京横浜毎日新聞」は嚶鳴社の機関新聞という性格をも持つことになる。そして肥塚は再び入社し、筆を振るっていく。明治15年2月神奈川県会議員の補欠として島田三郎と共に当選し、以後17・20・21年の3期にわたって務めた。同年3月、立憲改進黨が結成されると、沼間・島田らとともに入党。明治27年3月の第3回選挙で故郷の兵庫県から立候補して当選し、以後大正4年の第12回選挙まで(第6回、第8回の2回を除く)衆議院議員として活躍した。開港五十年史の編纂、刊行はこの時期にあたる。

明治30年には農商務省鉱山局長、明治31年東京府知事、明治41年の第25議会から44年の第29議会までは衆議院副議長を務めた。東京市の市会議員、参事会員も務めている。また実業界においても、「東京横浜毎日新聞」の印刷を担当していた秀英社に出資し、監査役を務めたり、愛国生命保険会社の重役、日本キネトホン株式会社の社長を務めたりしている。大正9年(1920)12

月没。

新聞記者としての肥塚は『現行民権家品行録』『日本全国新聞記者評判記』などによると高い評価を得ており、演説も巧みであったようで『愛国民権演説家百詠選』『明治演説評判記』にも名があがっている。

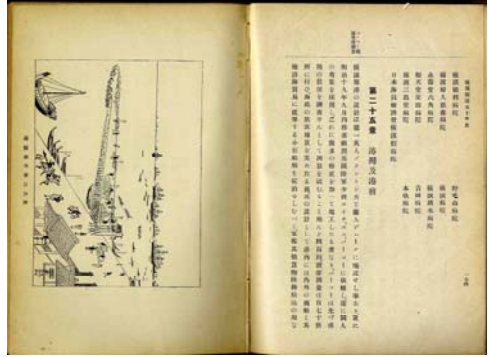
内容

上巻は、横浜が開港されるに至る背景として、古代からの日本対外交渉史が17章にわたり綴られている。その内容は、必ずしも横浜に限定したものではなく、日本の通史と捉えられる記述となっている。

一方、下巻(第18~41章)は、主として開港後の横浜の社会・経済を詳細に綴り、付録として人物誌が添えられている。

同じく明治42年(1909)に横浜貿易新報社から刊行された『横浜開港側面史』はそのはしがきで、『横浜開港五十年史』は「正面より横浜発達の経路を追ひたるもの」で「祿的」であるとしている。一方、開港50年を記念して、明治40年から横浜貿易新報紙上に連載されていた故老の聞き書きをまとめた『横浜開港側面史』は、「生きたる歴史の蓄音機」であり、「地誌なり、外交史なり、文明史なり、将た風俗史なり」という。そして『横浜開港側面史』は『横浜開港五十年史』を併読することで「其全きを成すべきなり」とも述べている。

『横浜開港小史』は同じく明治42年6月に、警眼社から刊行されている。著者川本三郎、校閲者肥塚龍。川本の発刊の辞によると、「横浜開港五十年史は、横浜商業会議所が多年の経営と、多額の費用とで此頃発刊したもの」であり「編纂の目的は横浜市を中心として起りたる諸多の事歴を細論詳説せんとする」ことなので、結果的に大冊となり、高価になってしまった。これでは広く世間にいきわたることは難しいので、「其編中の要部を摘録して一小冊子と為し、買ひ易く、読み易く、而して横浜商業会議所の目的を側面より助けん」との思いで発刊したという。



『横浜開港五十年史』横浜商業会議所
挿絵 文久3年の横浜港



史料本文を読む

<原本>

- 『横浜開港五十年史(上・下)』肥塚龍著 横浜商業会議所 1909 [K26.1/2]
※現在は入手困難 国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」、横浜市立図書館「YOKOHAMA'S MEMORY」などによって、HP上で閲覧可

<覆刻本>

- 『横浜開港五十年史(上・下)』横浜商業会議所編 名著出版 1973 [K26.1/2A]

<関連資料>

- 『横浜開港側面史』横浜貿易新報社 1909 [K26.1/10]
※国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」で閲覧可
- 『横浜開港側面史』歴史図書社 1979 [K26.1/10A] ※翻刻本
- 『横浜開港小史』川本三郎著 警眼社 1909 [K25.1/8]
※国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」で閲覧可



史料についてさらに知る－参考文献－

- ◆石井光太郎「横浜本発掘誌Ⅱ-開国と開港」(『横浜の本と文化』横浜市中心図書館 1994 [K02.1/36])
- ◆阿部安成「開港五十年と横浜の歴史編纂-歴史叙述と歴史意識」(『一橋論叢』vol.117(2) 日本評論社 1997 [Z330.5/16])
- ◆内海孝「本商業会議所の「開港五十年祭」」(『横浜商工会議所百年史』横浜商工会議所 1981 [K67.1/41/3])
- *『愛国民権演説家百詠選(下)』谷壮太郎編 歌川豊宣画 松林堂 1882
- *『現行民権家品行録』卷之2 久我懋正著 秩山堂 1882
- *『日本全国新聞記者評判記』大井通明著 師岡国 1882
※『新聞史資料集成』明治期篇第4巻(ゆまに書房 1995)に翻刻して収録。
※以上3冊の原本は、国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」で閲覧可
- *『明治演説評判記』栗田信太郎著 変了閣 1882
- *『肥塚龍自叙伝』肥塚麒一編 肥塚麒一 1922
- ◆西田長寿 高橋昌郎「解題 肥塚龍」(『明治新聞人文学集』筑摩書房 1979 (明治文学全集) [918.6/176/91])
- ◆木村勲「兵庫県出身の先覚的民権家・肥塚龍」(『地域史研究』vol.13(1) 尼崎市立地域研究史料館 1983 [Z210.05/14])
- ◆松尾章一「肥塚龍小論」(『自由民権思想の研究』増補改訂 松尾章一 日本経済評論社 1990 [311.21/101])
- ◆稲田雅洋「政談演説会の隆盛と雄弁家たち」(『自由民権の文化史』稲田雅洋著 筑摩書房 2000 [210.63JJ/168])